

《2020 年 11 月（通算 289 回）月例会報告》

「With コロナ」の時代に向けて⑤ ー運動部活動における「大会」の意味・意義を考えるー

【日 時】2020 年 11 月 19 日（木）19：00～21：00

（終了後、オンライン懇親会 は 23：30 まで／ライブは 23：50 まで）

【会 場】オンライン（Zoom）とライブのハイブリッド ※演者 2 名は「はなの舞 茗荷谷店」から配信

【テーマ】「with コロナ」の時代に向けて⑤ー運動部活動における「大会」の意味・意義を考える

【演 者】蔵森紀昭（成城学園高校／全国高体連サッカー専門部技術委員長）、嶋崎雅規（国際武道大学）
中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（会員・メンバー）13 名】 注）★は NPO 会員

★安藤裕一（(株)GMSS ヒューマンラボ）、★金子正彦（サロン 2002）、川戸湧也（仙台大学）、
★岸卓巨（NPO サロン事務局長）、北原由（都立武蔵高等学校）、小池靖、嶋崎雅規（国際武道大学）、
高田勝敏（SV Empor Berlin e.V.）、★茅野栄一（帝京大学）、張寿山（明治大学／スフィード世田谷）、
★中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高校）、本郷由希（サロンメンバー）、
安松幹展（立教大学コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科）

【参加者（未会員）5 名】

川島健司（読売新聞東京本社編集委員室）、蔵森紀昭（成城学園高校）、城村勉、前川敏也（FC マトリックス）、
由井一成（学習院大学）

【報告書作成者】田島璃子、中塚義実ほか

<目 次>

はじめに

- I. コロナ禍の運動部活動ーある高校の現場より（中塚義実）
- II. ユース年代の「大会」をめぐるーサッカー界の動向（蔵森紀昭）
<ディスカッション①>
- III. 運動部活動と「大会」ーコロナ禍でみえたこと（嶋崎雅規）
<ディスカッション②>

はじめに

1. 参加者紹介

中塚：今日の月例会は、演者2名（蔵森・中塚）が茗荷谷のお店から配信する「ハイブリッド型」です。試行錯誤しながら進めます。注意事項をご確認ください。

NPO サロン理事長の中塚です。筑波大学附属高校で保健体育の教師をして34年目です。

最初に演者紹介をします。そのあと、参加者からも一言ずついただき、中身に入ろうと思います。

嶋崎：嶋崎です。NPO サロンの理事で月例会担当です。国際武道大学で教員をしており、もともとは東京の高校でラグビー部の顧問などをしていました。専門領域は体育経営学で、とくに運動部について研究しています。

蔵森：蔵森です。教育実習で中塚先生にお世話になりました。私の師匠です。いま成城学園に勤務しており、同時に全国高体連技術委員長として働いています。部活動について思っていることを話します。忌憚のないご意見を。

中塚：この3人で「運動部活動の大会」について取り上げます。今日の議論は12月6日の部活動学会研究集会につながりますが、そこでは「文化部」も含めた「部活動の大会」として議論します。かるた競技で尽力された由井一成さんにもご登壇いただきますが、今日はその由井さんも来られています。

由井：日本女子大学附属高校に11年勤務し、高文連かるた専門部で幹事をしていました。いまは学習院大学の非常勤講師で、部活動学会では事務局次長としてかかわっています。中塚先生が部活動学会研究集会の企画・運営を担っておられ、その手伝いをしています。12月6日のオンライン研究集会で自分も話させていただくので、その準備も兼ねて勉強に参りました。よろしくお願いします。

中塚：ではせっかくなので、皆さんからもひと言ずつ。

本郷：IT関係の仕事をしていて、サッカー観戦が趣味。オンラインの月例会なので参加しやすくうれしいです。

茅野：帝京大学の茅野です。NPO 法人サロン2002の監事をしています。部活動は高校以後ご縁がありませんが、大学に入ってくる学生にも関係するので今日の話を楽しみにしています。

張：スポネットサロンのメンバーです。明治大学でスポーツ社会学の研究をしていて、世田谷スフィードというなでしこ2部クラブの副代表をしています。WEリーグができたので強豪と当たれなくなり残念。地域市民クラブがどうやったら成り立つかを研究しています。

安松：お久しぶりです。日本フットボール学会で来年3月の学会大会で、コロナに関するシンポジウムを企画しています。その件で中塚先生に、コロナの部活動へのインパクトについてご相談した際にこの会を紹介され、早速今年の会費を払って参加しました。

注意事項

◆月例会の記録

- ・記録用として主催者が録画させていただきます。映像を公開することはありません。
- ・本日の内容は、要点を文字起こしして報告書にまとめ、NPOサロンのHPで公開します（部分的に広報誌にも掲載します）。案の段階で内容をご確認いただくのでご協力ください（HP上に名前を出したくない方はご連絡ください）
- ・著作権保護および、他の参加者の情報保護のため、**月例会中の記録行為（録画・スクリーンショット・撮影等）は固くお断り致します。**

◆氏名の表示

- ・氏名をわかりやすく表示してください。サロン2002のメンバー・会員はその旨記してください。（中塚義実【サロン理事長】など）

◆音声と画像

- ・発表中は音声をミュートにしてください。
- ・画像はできるだけオンにし、反応は大きめにお願いします（その方が話しやすい）。

◆質問や発言

- ・質問やコメントがあれば、まずはチャットでお示しください。
- ・時間ができれば質疑応答の時間を設けます。

川戸：仙台大学で教員をしています。専門は体育科教育と柔道です。大学院生時代に中塚先生にお世話になりました。久しぶりの参加です。

高田：ベルリンに滞在しています。以前東京都サッカー協会で働いていました。久しぶりの参加です。ドイツは部分的ロックダウンで少し大変です。

田島：この3月に筑波大学附属高校を卒業しました。早稲田大学ではスポーツ新聞をつくるサークルに入っています。高校時代はテニス部でした。

川島：全国高校総体の共催者、読売新聞社に勤めます。中塚先生とは毎月、全国高体連研究部の会議で一緒させていただいています。今日は高校総体や部活動の大会の話を楽しみに参加しました。

前川：大阪府サッカー協会で三種の副委員長をしています。中学校の教員で、地域のクラブチームの代表もしています。大阪のクラブユース連盟にも参加しているチームです。テーマが部活動についてということで、これから先の部活動や、大会がなくなった状況でどのように大会をやればいいのか勉強したい。

2. 本月例会の位置づけ

なかにみに入る前に、サロンの月例会も今年はコロナ禍でえらいことになっているということを、簡単におさらいしておきたいと思います。1997年から毎月やってきた月例会は2月・3月は延期となりました。4月からオンラインで再開し、「新型コロナにどう向き合うか」のテーマのもと、3名ずつ話題提供する形で再開しました。部活動のことは5月に一度取り上げています。7月からは「with コロナ」をメインテーマに掲げ、U18 フットサル、アフリカ支援、スポーツボランティアの話題を取り上げ、今回につながります。

2020年度のNPOサロン月例会	本日の月例会の位置付けー続編あり！
(2月・3月の月例会は延期) ＜4月からオンラインで再開＞ 「新型コロナ」にどう向き合うか 4/28 ①学校・職場(と自宅)・スポーツイベント (中塚義実、笹原勉、徳田仁) 5/29 ②部活動・市民イベント・障がい者の現場より (嶋崎雅規、本多克己、浅見明子) 「withコロナ」の時代に向けて 7/8 ①2020年度のU-18フットサルをめぐって (中塚義実、本多克己) 8/20 ②スポーツは人々のライフラインとなれるか【アフリカ編】(岸卓巨) 9/25 ③地域スポーツクラブの現場より:ドクターの視点から(安藤裕一) 10/29 ④日本におけるスポーツボランティアの経緯と今後 (小松章一) 11/19 ⑤運動部活動における「大会」の意味・意義を考える	11/19(木) NPOサロン 通算289回月例会 「withコロナ」の時代に向けて⑤ 運動部活動における「大会」の意味・意義を考える (蔵森紀昭、嶋崎雅規、中塚義実) ↓ 12/6(日) 日本部活動学会 第3回研究集会 コロナ禍における部活動のすがた ー「大会」の意味・意義を考える (蔵森・嶋崎・中塚&由井一成) ↓ 12/13(日) NPOサロン 公開シンポジウム2020 「With/Afterコロナ」の時代に向けて ーコロナ禍でみえた“ゆたかなくらし”の新しいすがた

先ほども言いましたが、本日の月例会には続編があります。12月6日の日本部活同学会研究集会で「コロナ禍における部活動のすがたー「大会」の意味・意義を考える」と題して、運動部だけではなく文化部の話題も取り上げます。演者は、今日の3人に加えて由井一成さんです。

NPO サロンの主催事業としては、12月13日の公開シンポジウムが2部構成であり、今日の話題はそこにもつながっていくことになります。両イベントの案内チラシができました。サロンのメンバーには本日送りました。メンバー以外の方も、ホームページ等でご確認のうえ、ぜひご参加ください。

I. コロナ禍の運動部活動ーある高校の現場より（中塚義実）

1. 概況

コロナ禍の学校の様子については、4月の月例会で一度お話しさせていただきました。筑波大学附属高校では、卒業式は在校生と教員だけで実施しました。いままで見たことのないような光景でしたが、それでもできただけよかったです。しかし入学式はできませんでした。

4月7日に緊急事態宣言が発令され、休校期間が延長されます。「生徒の学習保障」について、いまだかつてないほど教員が連携しあい、いち早くオンライン授業への取り組みを始めます。休校期間は5月末まで続きました。6月1日から学年単位の分散登校がはじまり、生徒はホームルームと体育実技のみ行いました。休校期間を通して体育の重要性を皆が認識できたのはよかったと思います。短い夏休みが終わり、8月24日の休みあけから40分の6時間授業になり、10月中旬の後期からは45分授業。まだ平常ではありませんが、徐々に元に戻しています。

これに部活関係を絡めます。あとでもう少し詳しく説明しますが、赤字で書いてあるところが運動部の大会です。「湘南戦」中止、春休み部活動禁止、「開成レース」「院戦」、そして高校総体が中止と、大会の中止が続きます。6月に分散登校が始まって最初のうちには部活動はできません。6月中旬から徐々にできるようになりますが、1年生の入部は遅れます。そしてほとんどの3年生は活動を再開しないままやめていきました。

サッカーで言うと、高校選手権は開催する方向になりましたが、DUOリーグの再開については高体連より後回しとなり、9月になって「できない」との判断になりました。いま高体連の新人戦をやっているところです。一方で、校内の大会・イベントは、工夫して実施しました。スポーツ大会やオンライン文化祭などです。

2. 定期戦文化

筑波大附属高校には定期戦があります。高体連の大会についてはあとで蔵森さんにさせていただきますが、本校で生徒たちが本当に残念がっていたのは定期戦の方だったかもしれません。

真っ先に中止が決まったのは、3月15日（日）に予定されていた附属・湘南サッカー定期戦、通称「湘南戦」です。戦後すぐにはじまったこの定期戦は、今回が72回目でした。これまでの通算成績は、附属の21勝36敗14分です。今年は附属のホームゲームだったのですが、2月中に中止決定となりました（湘南は2年に一度の欧州遠征も中止）。

始まったころは附属も湘南も全国レベルの強豪校で、この定期戦が日本一を決する試合とも言えるものだったのですが、それがいまでも続いています。試合をするだけでなく、試合後の交換会が貴重です。写真は2年前のものですが、試合後に桐蔭会館で両校会食後にクイズ大会をやっているところです。両校の卒業生は、大学や社会人になってもいろんなところでつながることでしょう。

4月18日に予定されていた開成高校とのボートレース「開成レース」は、戸田のボートコースで行われます。通算成績は拮抗していて附属の46勝45敗。第92回の今年は、第1回から数えてちょうど100周年だったそうです。両校が応援団を編成します。附属は弱そうですが開成の応援団は人数も多く統一感があります。開成は中学1年と、高校から入学した高1が応援に行き、開成高校の文化を知る機会となります。本校は1年生が遠足として参加します。ほんわかしながら、伝統行事を通して学校文化を肌で感じる機会となっています。

筑波大学附属高校の場合

3/2～ 臨時休校

3/18 卒業式：卒業生と教員のみ

3/19 終業式：中止

4/9 入学式・始業式中止

4/11～「オンライン授業」開始

4/27 5月末日まで休校継続！

5/12～「オンライン時間割」

6/1～ 分散A（学年単位）：HRと体育

6/14～分散B（オンラインと併用）

8/1～23 短い夏休み

8/24～分散C（一斉登校。40分授業）

10/14～ 後期開始（45分授業に）

2月末「湘南戦」(3/15)中止決定

3月初旬 春休みの部活動禁止

「開成レース」(4/18) 中止決定

4月初旬「院戦」(6/6)中止決定

高体連関東大会中止決定

4/26 高校総体中止決定

6月中は都高体連の公式戦中止

部活動は分散Bで徐々に再開

1年生の正式入部は7月中旬

高校サッカー選手権は？？

8月は延期。9月に開催できるか…

本大会も開催の方向で！

DUOリーグは？→ 9月に判断

U-18フットサルは？ →夏は中止

11月 新人戦（いつまで続く？）

<校内の「大会」は工夫して実施>

10/14スポーツ大会

10/17～18オンライン文化祭

そして附属と学習院の総合定期戦「院戦」。ほぼすべての運動部が競い合い、総合優勝を争います。写真は第 68 回で附属が会場になったときのものです。サッカーの引き分けが響いて 9 勝 9 敗 1 分けで両校優勝。ここ 10 年程附属は勝っていなかったもので、引き分けではありますが喜んでいきます。カップを掲げているのは実行委員の生徒です。

高体連や高文連主催のメジャーな大会がなくなったこともショックですが、本校の生徒にとってはこのような定期戦、とくに「院戦」がなくなったことが大きな喪失感となったように思います。

高体連主催大会は 3 つあります。サッカーを例に挙げて言うと、6 月初旬の関東大会。予選は前年の新人戦にはじまり 4 月に再開、5 月 5 日が決勝でした。高校総体（インターハイ）は、今年はオリンピックの影響で変則的な開催の予定でしたが例年 8 月初旬に開かれます。予選は 4 月末にはじまり 6 月 21 日に決勝の予定でした。いずれも中止。

こういう中で年末年始の高校選手権です。東京都予選は 8 月中旬にはじまり 11 月 14 日に決勝戦の予定でしたが、8 月の開催は見送られ、9 月から再開。そして決勝戦は先日無事に行われました。選手権は何とか開こうということで準備を進めてこられたのが蔵森さんたちです。

ということで「ゲキサカ」の記事はすでにお読みいただいていると思います。良い記事ですね。これを読んで、蔵森さんに話してもらいたいと思い、依頼した次第です。

では蔵森さん、続けてどうぞ。

II. ユース年代の「大会」をめぐってーサッカー界の動向（蔵森紀昭）

1. 日本の「強み」としての部活動

部活について、昨日も学校の中で勉強会をやりました。働き方改革などあるなかで議論噴出。最後に「では部活動は必要ですか？」と聞くと、先生方は「大変だが価値もある」と言います。じゃあどういう方向にすればよいのでしょうか。このことをいつも考えています。

一方で、選手権大会の決勝は海外の指導者が視察に来ることもあります。彼らの感想は「クレイジー。ユース年代の大会に人が入りすぎ。まねできないしあり得ない!」。日本の中ではここがピークになっているからそのあと伸びなくなるという議論もかつてはありました。しかしいまは逆に、部活動は世界に誇れる文化である、世界ではまねすることができない日本ならではのものであると考えています。ワールドカップでトロフィー取るために世界を模してきたが、それを続けても優勝できない。それならば、世界がまねできない部活のシステムと、J の下部組織や地域クラブのユースチーム、いろんなところから選手が出てくるシステムを大切にすべきだと考えています。高体連の大会のあり方を、サッカー界全体で考えていこうというスタンスになってきました。そういった背景が高校サッカー選手権にはあります。

2. コロナ禍における高校サッカー選手権大会ー「大会」をどう位置付けるか

コロナ禍における今年度の高校サッカー選手権大会について話をします。

夏の甲子園が中止になったとき「引退」という言葉がいろんなところで目にしました。「アマチュアに引退なし」というのは中塚先生の受け売りですが、そのように言いながらも、実際はどんどんやめていく。どこかで強気な発言をする必要があると感じ、講談社の WEB マガジン「ゲキサカ」に協力してもらい、インタビュー記事を書いてもらいました。目的は選手への働きかけです。「頑張っ続けてよう」という発信です。指導者からは「あれのおかげで選手を励ますことができた」と言われました。いまのところ選手権は実施の方向で動いておりほっとしています。

一方で、「引退」を踏みとどまった選手たちは、そう言いながらトーナメントに参加しても初戦で負けると 1 試合で消えていきます。同じユニフォームを着ながらピッチに立てない者もいます。トーナメントはほかのスポーツでも当たり前。

コロナの経験によって、当たり前が当たり前でないとたくさん気づかされました。一つがトーナメントという考え

方。トーナメントとリーグのそれぞれにメリットとデメリットありますが、最終的には両方を交えたゲーム環境が、日本ならではの、部活ならではの環境になるのではないかと考えます。

とは言え、簡単に変えられるものではありません。キーワードを整理しながらやっていかねばなりません。大人のかかわり方という目線と、選手の目線。2つの目線で物事を考える必要があります。部活動のすばらしさを確認しながらも、問題点に手を加えていくきっかけを作る必要があります。

モチベーションの温度差もあります。それぞれのチームが目標を持って戦える公式戦を作りたい。補欠ゼロという関わり方。1チームの人数も違います。リーグ戦で、サッカーはそれができています。

指導者とうまくいかななくても3年間過ごさなければならない。自分に合ったレベルや指導者のもとで学ぶことがすぐにはできるようなシステムにしたいと考えます。高体連や中体連は学校縛りがあるのでクラブチームに行く。しかし両者間の移籍には6か月間出場できないなどのブレーキがあり、無駄な時間を過ごしています。こういう部分を変えていかないとはいけません。勝っても負けても翌週に生かせるようなリーグ戦。これを交えながらやれないか、ということ議論しています。

暑熱の問題もあります。サッカー界では「プレイヤーズ・ファースト」という言葉があり、指導者はみな頑張っています。けど教師は疲弊しています。実際に家庭の危機があったこともあります。「同じことを若い指導者に託すのは無理。サッカーは好きだが、サッカーの仕事と教師の仕事と家庭の両立はできない。そうさやかれてサッカー界から離れる指導者も多い」と聞いたことがあります。JFA（日本サッカー協会）の内部でも、オフシーズンをはっきりつくるために「夏休みに公式戦をやらない」などの議論をしています。高体連からすると、夏休みがかき入れどきですが、そこを変えていこうと。これが安全を担保し、事故を防ぐことにつながる。こんなことを考えて方向性を探っています。いろいろな改革をしなければいけません。

3. 今後に向けて

いま心がけていることは6つあります。

1) 全てをコロナのせいにしない。コロナを経験してわかったことを学びとして生かす。

「部活動は重要。当たり前」がおかしいところがあります。そこをしっかりと取り上げていく。

2) 大きな変化を好まない日常が存在していることを自覚する。

世の中は大きな変化を好みません。特に年寄り。学校の中ではそういう人が権限を握っています。そういう人に情熱をもって接して変化の勇気をもらうことが重要です。

3) 小さな変化・改革を縦と横に拡散する意識が大切。

(縦：高校年代から中学・大学年代へ 横：サッカーから他種目へ)

サッカーはできるけど、他では無理ですよよく言われます。サッカーでできたことを他のスポーツに広めていく発想を持つことが重要です。また高体連ができれば中学、大学に広がります。学校教育における部活動の良さを広げるためには高校年代だけではだめです。部活動全体のエネルギーを大きくして改革したいと考えます。

4) 現状維持は危機であるという認識から議論をスタートさせることが大切である。

心に火をつける意味で、「現状維持は危機」と言っています。

5) ボトムアップとトップダウンの両方向から議論をスタートさせる。

トップダウンではなく、下から変えたいですね。やらせてくれと発信していく姿勢です。

6) 何もしないことは罪である。コロナでの学びを無駄にせず、今こそアクションを！

学校の先生にはそうやって伝え、変えるチャンスだと言っています。新しいことに取り組む気持ちが薄れかけていましたが、コロナ禍はチャンスであると自分に言い聞かせ、自分に火をつけ動き出すチャレンジをしたい。

今回の部活動学会、サロンの月例会での発表も、当初は後ろ向きな自分がいましたが、自分に火をつけました。

<ディスカッション①>

中塚：海外の人が高校選手権を見たらびっくりするという話がありました。今日はベルリンから参加されている高田さんは、日ごろからドイツで育成に携わっておられます。コメントをください。

高田：高校選手権や甲子園といった大きな大会がユース年代であるのはヨーロッパでは考えにくいですね。ユース年代の試合で 5～6 万の観客は考えられない数字です。ユース年代のサッカーの観客数の最大が、ヨーロッパの予選で 2 万人だという記事を読んだことがあります。リーグ戦について、基本的にはリーグ戦がベースで、カップ戦もあります。ユース年代の全国リーグは、ドイツではやめようとしています。U-19、U-17 は何年か後に廃止の方向です。地域ごとのリーグになる。お金の面や、地域の偏りの問題などが理由です。

中塚：普段は聞くことができないホットな話ですね。

安松：JFA のフィジカルフィットネスプロジェクトでもシーズン制の話が出ていました。秋冬にするというものです。しかしそうした場合、北日本のチームがどのようになるのが気になります。

蔵森：リーグ戦の話の中で、トップにあるプレミアリーグの試合数を増やそうと考えています。青森山田の黒田さんは「12 月に入ると最後に 3 週連続 away になるのはきつい」と言っています。そのあたりのデメリットがあっても、他のメリットを北のチームに生かす必要があるでしょう。年間でバランスをとれるように組むことを考えないとうまくいきません。

安松：もう一つ。今年難しかったのが、結果的に夏からシーズンがスタートしたということです。暑熱環境への馴化をしつつ体力も高めていく。去年までは寒い時期から走ってシーズンに向けて体を作っていましたが、夏スタートだとそこが難しい。夏は休んでスタートするのが良いと思いますが、熱中症との関係で難しいと感じます。

蔵森：フィジカルの勉強会に参加したときに同じような話がありました。苦労してガイドラインを作ってもらっています。経験を積み上げてモデルを作る必要があります。「暑い時期に公式戦があるから暑い中で走れるようにしなければ」という考え方に陥りがちですが、涼しいところで合宿を行えたり無理に走ったりする必要がなくなると考えています。

張：カップ戦文化の弊害はたくさん聞きます。協会内部でも真面目に考えていると聞き、よいなと思いました。難しいと思いますが、高校選手権のようなやめがたい大会は、カップ戦文化からリーグ戦文化になるとどうなるのでしょうか。リーグ戦文化は、レベルが高い上位層は対応できますが、そうではなく、1 回戦で負けるような学校同士のリーグ戦は本当にやっていけるのでしょうか。内部でどんな検討がされているか教えてください。

蔵森：個人的な意見です。「青森山田は青森県代表として出ないと」という意識があります。するとシードされても 3～4 試合は青森県内でやり、10-0 の試合になります。どんなに力の差があってもトップチームが出るので、それが弊害になっています。それなら、プレミアリーグで同じくらいのチームと戦ってもらい、力をつけて全国大会に出てほしいと考えます。リーグの最高峰は、県予選をやっているときにはリーグをやり、全国大会から出るという枠組みにしたい。リーグ戦を基軸にしたシード方式をレベル別に考え、上位層は最後の方からカップ戦に入っていくというイメージです。しかしこういう発想にアレルギーを示す人がたくさんいます。リーグ戦がなぜメインなんだと言われてしまう。リーグ戦を基軸に、ではなくトーナメントのために利用すると。勝つか負けるかわからない試

合を増やしていこうと。リーグ戦の時期とカップ戦の時期がいまは分かれています。カップ戦のほうがもともと伝統があるので、1年間で一番いい時期にやっています。9月とか10月に。けど1回戦で負けるとずっと試合がなくなります。季節のいい時期に公式戦がたくさんあり、オフシーズンがあるようなカレンダーを作りたいと考えます。

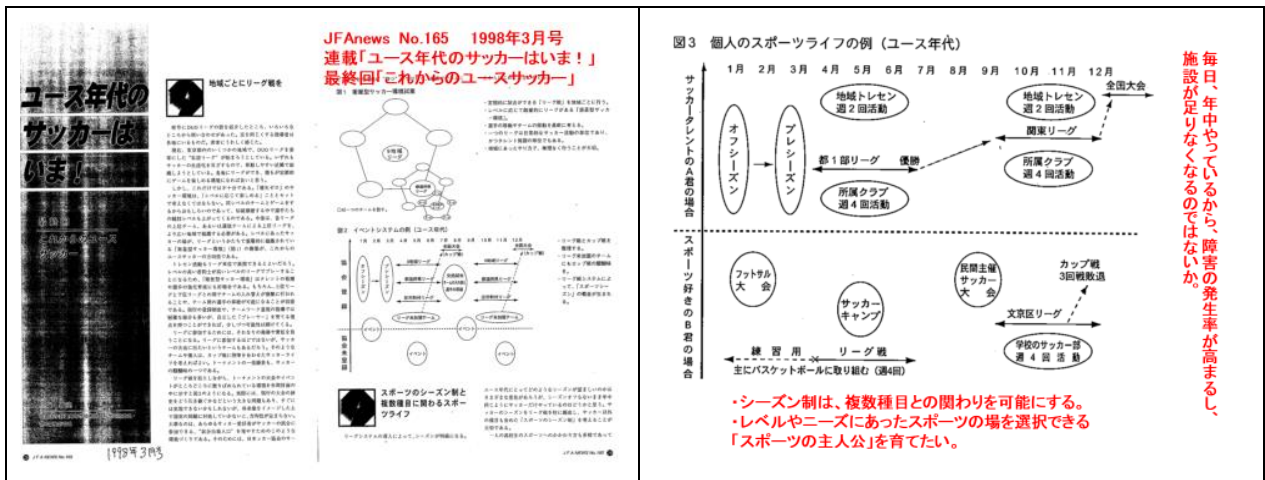
張：選手権自体は各県の代表ではないというイメージ？

蔵森：全国大会の規模を大きくしたい、48代表ではなく64まで広げたいと考えています。テレビの放送枠とかいろいろな問題がありますが、全国大会のステージに立てる選手を多くしていきたいということです。

張：強い学校は対応できますが、顧問もないような学校は対応できるのでしょうか。

蔵森：サッカー界でそういう心配は多分にありました。リーグ運営は参加チームがやる。お金を払って出ただけというのではなく、自分で作るところがリーグ戦文化です。BチームやCチーム、たくさんできるようにし、いまでは6~7部まであります。下の方では規約を緩くし、1年間の試合数も減らしています。参加しやすいイメージを作っています。審判もユース審判といって、自分たちが笛を吹く。すべてがうまくいっているかはわかりませんが、参加チームは増えています。全国に広めたときに、「東京のこの数でもやれているのだからできる！」というイメージを発信しています。あとは地域色を出しながらやればよいでしょう。

中塚：いまの話の補足です。20年以上前ですが、JFAの機関紙に「ユース年代のサッカーはいま！」という連載記事を書いていました。1996年に東京ローカルでDUOリーグがはじまり、それを広げていく構想です。最終的なイメージを1998年3月号に示しました。底辺は近場で、上に行くほど広範囲でリーグが整備されている「衛星型サッカー環境」。学校の1学期と2学期でリーグ戦をやり、3学期はオフシーズンでありプレーシーズン。リーグ戦の合間にカップ戦があるかたちをつくり、シーズンを明確化する。ユース年代においてもいろんなスポーツでリーグ環境を整える。そうすれば、サッカータレントのA君のように年間を通してサッカーリーグに関わるものもいれば、スポーツ好きのB君のように、前期はバスケット、後期はサッカーリーグと、前後期で異なるスポーツのリーグに関わるようなスポーツライフも可能になる。スポーツのシーズン制を、リーグ環境を整備しながら導入していこうと提案したのが20年前のことです。



ではここから嶋崎さんのお話を伺いましょう。

Ⅲ. 運動部活動と「大会」ーコロナ禍でみえたこと（嶋崎雅規）

1. コロナ禍の高校野球報道から感じたこと

5 月に月例会で発表しました。今回はそれを下敷きにして、その後の動向も含めて発表させていただきます。

まず、高校総体。これは 4 月 27 日の朝刊です。また 5 月 21 日の甲子園中止。朝日新聞の記事です。マスコミは、「無念の思いをにじませた」「嘆く一方、理解も示した」というような論調です。気持ちの整理がついていない、大会がなくなるのは残念、悔しいし残念。「大学への推薦基準を満たすことができなくなる」の記事もあります。何のための部活をやっているのかと疑問に思いました。勝利に紐づいた進学や就職が不確かになっても、高校生は競技を続けたいと思えるかという良い機会になったと思います。

大会会長は朝日新聞の社長です。甲子園が新聞社のイベントだと改めて思い知らされました。野球の人のほうが、甲子園が絶対的な目標だった。「甲子園で野球ができなくなった」というだけですべてが終わったと思うのはおかしい。高校野球のあり方が根本的に問いなおされたと思います。週 6 日も強くなるために戦うべきか。代替大会をやるべきだという考えになる。

今夏、選抜出場予定の 32 校が交流戦を行いました。「なんでそこまでして甲子園で野球をしなければいけないか」と当初感じていましたが、いざやってみると、普段の甲子園とは違う良さがありました。交流大会ということで、勝っても負けてもそこで終わり。そこで、勝ち負けより大切なもの、全力で野球をする喜びに気づいたのではないのでしょうか。そして主催者、運営スタッフがいる非日常の場で、感謝の気持ちが生まれたのではないのでしょうか。私自身もすがすがしい気持ちになりました。ノックアウト方式のトーナメント戦との違いですね。

2. スポーツのあり方と「DUO リーグ」の理念

スポーツの位置づけを明確にしたい。日常の時空間があり、その中で、スポーツ空間というのは非日常。日本人はこのところの切り分けがあまり上手ではないようです。スポーツが日常的になり、日常のイライラを非日常に持ち込んでしまいがちです。スポーツができることは幸せなことです。飢餓に苦しむ子にスポーツができるか、骨折した状態でスポーツができるか。スポーツは健康であり、施設があり、支える人があるからできる。コロナ禍は、それを認識する良いきっかけになったと思います。

中塚先生の話にも合った「DUO リーグ」。「理念」に大事なことが記されています。歯磨き感覚、引退なしのスポーツライフ。日常生活にサッカーを無理なく位置付ける。リーグ戦の文化を高校のスポーツの中にしっかり位置づけようという試み。

JFA もリーグ戦化ガイドラインがあった。年間を通した基軸となるリーグ戦、能力別リーグ、選手全員が公式戦に出場できる。

M-TM サイクル。負けたら終わりではない。リスクにトライできる。課題を抽出してトレーニングに落とし込む。スキルがあればスポーツがより楽しくなる。

3. バスケットボール界のユースリーグ構想

バスケットボール界でも、U-12、15、18 でリーグ戦をやるということを協会がトップダウンで決めました。事業概要は都道府県協会が計画しています。昨年東京では U-18 リーグのプレ大会が 2 日間で行われました。しかし「理念」の話は出てきません。ただ「リーグ戦をやる」というだけです。バスケット界がリーグ戦を育成年代でやるという発想は良いのですが、サッカー界と違うのは理念が共有されていないということです。東京都高体連加盟校は 320 校あり、予選だけで精いっぱい。試合に出られない選手に公式戦を経験させる良い機会ではあるのですが、いまひとつ前向きな感じはしません。

しかし、都道府県によって温度差があります。千葉県は今年度から U-18 リーグを行うことになっています。埼玉

県では「埼玉バスケットボールディベロップメントリーグ」という名称で、かなりきちっとした計画が立てられています。千葉には千葉ジェッツもあるので、U-18 の試合もジェッツの試合の前座にしたりし、盛り上げている。埼玉もしっかり計画を立ててやっている。

4. 生徒の自主的な活動として

そもそも、学習指導要領では、部活動は生徒の自主的・自発的な参加としており、教育課程との関連が図られるようになっています。しかし今までの部活動は、すでにあるものから選び、メニューや試合は先生が決めるという学校が多いです。

コロナ禍を機に見直すべきではないでしょうか。生徒の手に取り戻すチャンスです。

先ほど「院戦」の話がありました。生徒の実行委員会が運営します。早慶戦など規模の大きいものが大学にはありますが、こういうことを子どもの側から提案してみてもどうでしょう。プライベートリーグを組む。生徒だけでやるのは難しいので大人が支援するべきでしょうが、できることは生徒が考えるべきです。

コロナの時にトレーニングができなかった東海大附属大阪仰星高校では、自宅トレーニングとして「テーマに沿った料理づくり」がありました。強制ではありません。4 つの感謝の気持ち—家族、時間、健康、仲間への感謝がねらいです。集まってトレーニングできなくても、体を動かすだけでなく、心を育て、人間力をアップさせることができるはずです。

日々の活動の復活を目指したい。日常生活の中にスポーツが位置付けられていることがゆたかなスポーツライフにつながります。こういった日常生活の中のスポーツが大事です。放課後のスポーツ活動もなくすべきではありません。

学校の中にスポーツ活動は必要です。「働き方改革」も必要ですが、学校の部活動を外に出せば、経済格差による2極化が進んでしまいます。学校のスポーツ活動はしっかり残さなければいけません。自らの手で作るということを教育の中で伝えていく必要があります。

ゆたかなスポーツライフを育成するためと書かれています。このようなことをしっかり保健体育の先生にはやってもらいたいと考えます。総合型地域スポーツクラブを作ったり、ボランティアをしたり大会を立ち上げる、よい機会があると考えています。

中塚：ここまでの話を補足してもらいながら、バスケットボールのユースリーグの動きや、高校生による自主的・主体的な大会運営についても言及いただきました。まずは嶋崎さんの発表に関して質問などがあれば。

張：最初の中塚先生の発表で、定期戦文化、試合後に交流をするという話がありました。リーグ戦を開始する、あるいは定期戦の提案がありましたが、その際、試合後の交流まで視野に入れたような議論があるのでしょうか。日常の中でスポーツに取り組めばいいという話でしたが、運動後のコミュニケーションまで含めたところがスポーツ文化だと考えます。コロナ禍で運動をするということは、個人レベルでの継続はやりやすいが、そのあとの楽しみを共有するのが難しいと感じます。

嶋崎：ラグビー界ではアフターマッチファンクションは常識です。試合後に両チームで簡単な飲み食いしながら交流をするのはきわめて普通の話です。高校レベルでは残念ながらありませんが、大学では交流し、両チームキャプテンがスピーチをします。カップ戦で大会会場がどこになるかわからない場合は難しいですが。これも含めて定期戦が普及するなら、試合後の交流もセットになると考えます。

川戸：サッカー界の人が多く、情報共有として柔道の話をしたと思います。仙台大学では、試合と簡単なパーティー+勉強会をセットにした大会を実施しています。1泊2日で、初日は計量と勉強会。ここでは就職について

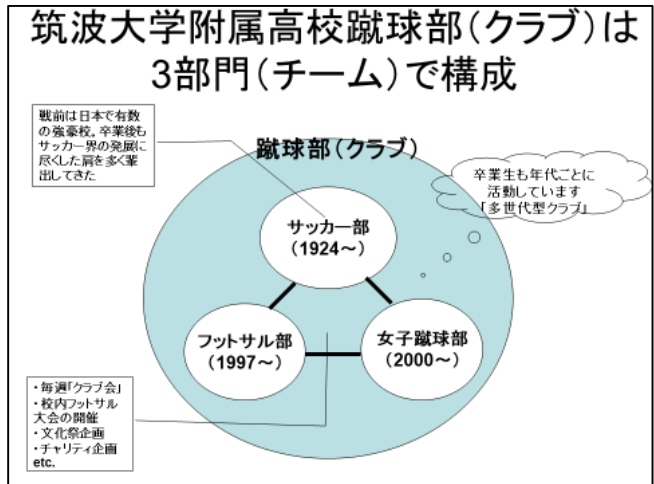
の話もあります。2 日目にできるだけたくさん試合をやり、最後はパーティです。柔道はシーズンがない種目なので 3 月の終わりごろになりますが、サッカーとは違った形でやっています。

<ディスカッション②>

中塚：嶋崎さんの話の補足として、私から筑波大学附属高校蹴球部の話題を少し。蹴球部とは、男子のサッカー部、女子でフットサルに取り組む者、そして男子のフットサル部の 3 部門が集まったクラブです。日頃はそれぞれで活動していますが、自分たちの大好きなサッカーやフットサルを学校中に広げていこうと、クラブ全体で校内フットサル大会を企画・運営していました。自分たちなりに遊びをマネジメントしていたのです。20 年ぐらい前から始め、年 2 回ずっと続け、男女それぞれ 10 数チームが参加して、昼休みにグラウンドにフットサルコートを 4 面作って盛り上がっていました。部員だけでなく学校中が楽しみにしているこの行事は、残念ながらここ数年できていません。理由はさまざまありますが、生徒たちの余裕がなくなってきたことが挙げられると思います。自分のことにしか関心を持ってない連中が増えている。心の余裕ですね。

コロナ禍ではありませんが、去年のできごとです。女子蹴球部が目標としていた東京都サッカー協会主催のレディースフットサル大会、大人が参加するこの大会に毎年高校生も何チームが出場しているのですが、そのレギュレーションが突然変わり、リーグ加盟していないと出場できなくなりました。そこで代替大会として行われたのが「第 1 回高校生女子フットサルチャンピオンシップ」です。2019 年 5 月 6 日に、フウガドールすみだレディースの全面協力のもと開催されました。高校 3 年最後の大会としてできたのはよいのですが、高校生が動いて実現した話でなく、筑波大附属高校の速水先生の呼びかけに応じた女子高生フットサル部の先生が連携して実現したものです。

けど 10 年前には、当時の生徒たちが「女子高生フットサル大会」を自分たちで主宰してやっていました。こういうことを企画することが、高校生にとってもものすごい力になるし自信になると思います。部活動はこういうことを経験する場でもあると思います。



サロン2002からのメッセージ ユース年代にリーグ戦を！

◆リーグは「組織」

特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たちが自分たちの活動をささえる一自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

◆リーグ戦は「生活」

平日のトレーニングと週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこへ持っていくかは重要です。地域ごとの事情もあるでしょう。

◆リーグ戦は「あそび」

“あそび”の前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に“あそび”仕組みがリーグ戦です。言われたから「総当たり戦を行う」ではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

リーグ戦とカップ戦の違い

カップ戦	リーグ戦
ノックアウト方式 (負ければ終わり)	総当り方式 (負けても次がある)
短期間	長期間
シーズン中の単発イベント	シーズンそのものを形成
非日常的な行事	日常生活の一部
移動をとまなう	生活圏で行なわれる
主催者が運営	当事者による自主運営

嶋崎さんからバスケットボールのリーグ戦の話がありました。ここで勘違いしてはいけない。リーグは組織です。自分たちでささえる活動を楽しむマインドが根底にあるものです。やりたい連中がやるのです。そしてリーグ戦は生活です。シーズンを形成することが含まれます。さらに、リーグ戦は遊びです。カップ戦との違いも明確です。短期間でチャンピオンを決めるカップ戦と、日常生活の一部であるリーグ戦。カップ戦は主催者が運営しますが、リーグ戦は当事者による自主運営。だからゲーム後の交流も可能となります。

「大会(イベント)」の定義(仮)	論点:運動部活動における「大会」の意味・意義
◆「大会(イベント)」の種類を明確化しておきたい ・「カップ戦」(ノックアウト方式) ・「リーグ戦」(総当たり戦) ・「定期戦」… 似た者同士で競い合う。拡大版が「6大学野球」など ・「フェスティバル」… 単発イベント。 ・「自分たちで仲間を集めて開く大会(または小会/フェスティバル)」。 ・「女子高生フットサル大会」は本校女子蹴球部が10年ほど前にはじめた。 ◆関連する用語を整理しておきたい(どこまで可能か) ・「トーナメントTournament」は、1か所に集まって短期間でチャンピオンを決める方法。ノックアウト方式が採用されることが多い。 ・「リーグ」は「組織」。 ・「リーグ戦」は、原則として総当たり方式(Round Robin System)で一定期間行われる。「生活」の一部であり、遊びを組織化したもの。 ・「選手」とは選ばれた人のこと。プレーする人の総称は「プレーヤー」 ・「チーム」はゲームを行う単位。「クラブ」はチームの集合体 ・大規模な(対外的な)ものは「大会」。小規模な(内部的な)ものは「小会」(東京高師附属中では「校内小会」あり)	1. 「日常」と「非日常」のとらえ方—何をもって「日常」とするか ※「大会」は「日常」の延長上にあるのか、それとも「非日常」ととらえるか →「お祭り」「節目」「区切り」とするのによいが、「大会」を最後に「引退」とは??? ※「日常」とするために「補欠ゼロ」の実現を=レベルやニーズに応じてプレイできる練習と試合(大会)のバランス ・平常時と非常時・緊急時(東日本大震災の時/コロナ禍において) 2. 「大会」の種類と位置づけ—年間スケジュールにどのように位置づけるか ・ノックアウト方式のカップ戦は非日常。リーグ戦は日常。日常化にはリーグ環境は必須 ・定期戦やフェスティバルも大事な「大会」。私的行事はあってもよいが乱立は避けたい。 ・レベルやニーズに応じてかわる「大会」を選択できるようにしたい。 3. 「大会」の範囲・規模—クラブ間交流を含むものとクラブ内のもの ・自分たちにあった「大会」を自分たちで作ればよい。そこに大きな学びがある。 ・チャンピオンを決める「大会」でなくともよい。プレイの喜びを感じられる「大会(または小会/フェスティバル)」を。 4. 「大会」の担い手—いかに育てるか ・「大会」運営を学校の先生に依存してはダメ。持続可能なあり方を探るべき。 ・ささえる喜び！ 自主運営と受益者負担。社会的に価値があることは社会で応分に負担。 ・学校体育の役割、使命がここにある！

議論を深めるために、「大会(イベント)」の種類、および関連する用語を整理しておきたいですね。どこまで共通理解が得られるかわかりませんが、共通の土俵で議論するためには重要です。ここで結論を出すわけではありませんが、今後の議論のために「論点」もいくつか提示しました。スライドをご覧ください。

中塚: 由井さんは、高文連でかるた競技に深くかかわってこられました。「ちはやぶる」で競技人口が増え、高文連の大会参加者が大幅に増えて大会運営が大変になったことが部活動学会で報告されていました。大会の担い手というところで、ここまでの話を踏まえてコメントいただけないでしょうか。

由井: 運動部の内部の話にこれまで触れる機会がなかったので、今日はたいへん勉強になりました。

担い手という点には関心があります。実際にかるたの方は、自分自身が現職だったときは運営にもかかわっていましたが、退職したあと、次の担い手がいなくて困りました。技術的な知識も必要だし、プログラムを作り、備品を作る技術が必要です。学校の先生がやるのは難しい。かるた専門部の運営面でも限界が来ています。そこでボランティア団体を作り、OB・OGが参加するようにしました。大会そのものは、頂点を決める一元的なつくりになってしまうので考える必要があります。誰かがいなくなると大会が傾くという状況から脱却する必要もあります。企業に支援していただくという発想もありますが、教育の一環で行っている制約もあります。これまでは、企業やボランティアなど、第三者が入ってくる橋渡しがありませんでした。リーグ戦をすると、先生集団の負担が大きくなってしまふと二の足を踏んでしまいます。外部の企画、団体と連携し、うまくコーディネーションする必要があると考えます。

蔵森: まさに担い手という部分ではおっしゃるとおりです。私自身も心がけています。「自分しかできない」となるのが危険です。「自分ならでは」の色は出したいですが、自分がずっとやるわけではありません。引き継いでいけるようにしなくてははいけません。だからと言って、単にマニュアルを引き継ぐだけではつまらない。いろいろな人がか

かわり、色を出しながらやる、そういうのが地域の特性でありカラーです。最低限のベースを作り、そのうえで自分の色を出すのが楽しいと思います。遊びの部分は残しながらうまく引き継ぐ。創意工夫の思いを持ってもらえるような楽しさがあるとよいでしょう。

今朝も、成城学園の中で 20 年以上続いているリーグ戦をやってきました。みんないい顔をしています。

前川：大阪南部の中体連の小さい地域ですが、公式戦をリーグ戦にして 6 年たちました。先生が大変なチームについてはリーグ戦ができるかという心配がありましたが、いざふたを開けてみると、喜んでいたのはそういう先生です。リーグ戦に参加すると、月に 2～3 回は試合ができます。普段は試合が全くできません。誰にお願いしたらいいかわからないし、強くないし。けど子どもたちは、リーグ戦をやるようになると月 2～3 回は試合があるので、平日も頑張ることができます。、危惧していた先生からの評価も高いですね。リーグ戦は、指導者が何回も同じ会場で顔を合わせ、コミュニケーションができてすごく良いと感じます。地区のレベルは低いけど底上げができています。子どもにとっても試合があるのが日常になっている。リーグ戦になってすごく良いと感じました。

田島：高校のテニス部では、国立大学附属高校どうして「国立学校リーグ」を作り、プログラムを作ってやっていた。後輩に引き継ぐ準備もしていましたがコロナでうまく引き継がれなかったのですが。そういった自主性が楽しめる部活になるとよいと思います。

中塚：議論は尽きませんが、21 時になったので、ここで月例会を締めたいと思います。残れる人はそのまま残ってオンライン懇親会で続きの話をしましょう。ちなみにこちらは茗荷谷駅前の居酒屋にいるので、いまから注文します。

以上